



今回は、日本霊長類学会大会・中高生ポスター発表の報告です。

◇ 「コドモをとりまくゴリラの社会構造」をテーマに学会発表！

日 時：平成30年7月14日(土) 場 所：武蔵大学 江古田キャンパス
参加者：大田裕介 兼松宜弘 三尾海斗 片岡幸大 藤根寛也 小川智司 加藤翔紀
内 容：雌雄2頭のコドモゴリラと他の個体との関わり方を追い、コドモの成長個体間関係の変化を考察する。

◇ 学会発表当日のようす ～生徒の感想から～



■私は霊長類の研究を通して主体的に学ぶということを実感できました。

データから何が言えるのか、それは正確なのか、ということを考えることには普段使わないような頭を使うような気がします。私は将来は霊長類の研究の道には、今のところ進む予定はありませんが、この経験は必ず将来に生かせると思います。また、現在活躍している学者の方々と近くで話ができて、助言をいただけたことも私にとってはとても良い経験になりました。

様々な試行錯誤を通して自分たちが言いたいことを論理的にわかりやすく他の人に説明しようと議論を進めてきましたが、正直、期間が短いこともあり、個人的には満足しなかった点もいくつかあります。その課題も含めて後輩たちが引き継いで、この研究をさらに高次のものにしてくれることを願います。

■私は高校1年生のときから今日まで霊長類研究を続けてきました。集大成の学会発表を終えた今、これまでのことを振り返ってみたいと思います。

自然科学部に入部し、霊長類班の紹介があったとき「一度経験してみて、つまらなかつたらやめればいいや」という安易な気持ちで参加を決定しました。はじめてゴリラをみたときは個体識別の難しさを痛感するとともに、それを軽々とやってしまう、そしてゴリラのことを本当に楽しそうに話す先輩が今でも印象に残っています。私はこのときキヨマサというコドモのオスゴリラを担当し、彼が私の担当個体となりました。キヨマサは動き回ることの多い活発なゴリラで、はじめは記録するのがとても大変でした。また、このころはまだ「ゴリラの研究をしている」と言うのに漠然とした恥ずかしさを感じていました。

高校2年生になったとき新チームが発足しました。自分たちで方針や定義、記録方法を考えるのはとても大変でしたが、今から思えば先輩に頼っていたことが





多かったように感じます。このころから個体識別は完璧にできるようになり、フィールドワークが一層楽しくなりました。そして、霊長類研究をインパクトのある自分のアピールポイントだと考えるようになりました。

1年前、私たちが中心学年となりました。同級生は3人とも確固とした「自分」を持っており、たびたび議論は口論のようになってしまいましたが、このことのおかげで論理的に考える力が鍛わったと思います。学会直前、切羽詰まって準備を進めているときは、受験勉強や学校行事と並行して取り組むマルチタスクの難しさや、計画的に活動を進める大切さが身にしみました。

私はこの霊長類研究をとおして自分の得意なことを見つけました。それはポスターを作ることです。これはやっていて楽しかったし、完成したとき筆舌に尽くしがたい達成感を味わうことができます。これからはこの技術を伸ばしていくとともに、まだまだ仲間に及んでいない文章力とプレゼン力を養っていきます。

最後に今まで支えてくださった先生方、たくさんのアドバイスをくださった学者の方々、本当にありがとうございました。霊長類研究に挑戦してよかったと心から思っています。この活動で身に付けた力は大学生になっても活かしていきたいです。



■私が霊長類研究を取り組み始めたのは、自分が周りの人がやっていないことをやりたいと常に思っていたからです。高校生の時ゴリラの観察をやっていた人なんてそうそういないであろうから、これはきっと良い経験になることは間違いないと思って始めたことを鮮明に覚えています。

2年間の研究を終えて感じることは、私のいまある高校人生は常にゴリラの研究ありきだったということです。どういうことなのか、いまからその説明という形で振り返りたいと思います。

先述したように、研究を始めたきっかけは単なる好奇心でした。そこまで頭を使い、悩ませる研究をしていくことではないだろうと甘く見ていたのが当時高校1年生だった私の実際です。ところが、1学年上の先輩方の研究に対する熱い姿勢と、妥協を許さない一日観察、そして毎日のように集まり話し合ったお昼会議など、想像を超えた活動がはじめて1年間続きました。先輩方が引退し、自分たちの代になってからは、引っ張ってくださっていた先輩方がいなくなり、上手く運べないことも多々ありましたが、無事今回の学会発表を終え、私たちも引退となりました。

ところで、なぜ高校生活がゴリラの研究ありきだったかといいますと、それは当然部活動だからということもありますが、私のいまの思考法、本気を出した時の文章作成、話術などは全てゴリラの研究で養われたといっても過言ではないからです。どの要素も、受験勉強はもちろん、任されたプレゼン作成、発表会スピーチ、生徒会活動といったあらゆる高校生活の活動の根本を支えるものです。つまり、ゴリラの研究で養われた力が同時進行で学校行事にフィードバックされていたと少なくとも私は実感しているということです。

ゴリラの研究でもっとも大変だった時期は、間違いなく1学年上の先輩と学会発表をしたときの直前です。データから言えることは何かについての論証は、特に他者の考察に対する否定を探すことによりより正確な考察をだしていく方法を取りましたが、これがかかなり大変であり、同時に大変有意義な時間でした。知らず知らずのうちに、いわゆる弁証法的な思考法を取っていたり、常にその論に対する否定要素はないかをよく検討する癖がついたからです。振り返ると、ゴリラ

の観察自体にも価値はありますが、データからの討論こそ本当に学ぶべきものがあつたと思っています。残念ながら学会発表で賞をとるといったことはできませんでしたが、紛れもなく私の力となり、今後の知的活動の根本を支える土台を作ることができたとおもっています。続けてきて、本当によかったです。

指導して下さった竹ノ下祐二先生に感謝し、そしてなによりこの活動自体を関高校の活動として始めて下さった先輩方に感謝したいです。ありがとうございました。



■今回の発表ではふたつのことに圧倒されました。

ひとつ目は霊長類を研究している同年代の学生の多さです。こんなにライバルがいるとは思いませんでした。発表も素晴らしく、ランチョンセミナーで彼らの思いを聞いていると自分の活動への熱意が、彼らよりも劣っていると感じざるを得なかったです。

ふたつ目は現場の空気です。学識ある学者がたくさんいて、自分たちの発表を聞きに来て、さらに質問してくることに「怯え」を感じました。ともかく、来年の発表までに色々な知識をつけて自信をもって、できるなら頂点を目指したいです。

■今回の発表で僕が思ったことはふたつあります。

ひとつ目は発表の難しさです。事前に練習していても本番では緊張して自分の話したいことを十分に伝えられなかったと思います。これからたくさん発表の場があるので本番でも緊張せず話せるようにたくさん練習したいです。

ふたつ目は先輩の偉大さです。発表の時も帰りの新幹線の中でも自分の伝えたいことを相手にわかりやすく説明出来ていて改めてすごいと思いました。僕も来年の学会の時にはあれくらい話せるようにしたいです。

今回の学会で学者の方、先輩からとても多くのことを学びました。これらを活かし、仲間や後輩と協力してより良い研究に出来るよう努力したいです。

◇ 陸域生態系、生物多様性、絶滅危惧種、自然遺産の保全。すべてSDGsです。



関高 SGH 課題研究では、国連の SDGs を基準にし、テーマを設定を行っています。Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標) の 17 の目標の中には、ゴリラの棲む熱帯雨林の保全に関わるテーマも掲げられています。